

小児アレルギーエドケータ―

薬局外で幅広く教育活動

小児アレルギーエドケータ―という資格があるのをご存じだろうか。気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどのアレルギー疾患を有する小児の適切な治療やケアが実践されるように患者教育を担う人材を育成するため、日本小児臨床アレルギー学会が2009年に立ち上げた資格だ。看護師に加えて13年には薬剤師、管理栄養士にも門戸が開かれた。全国に薬局を展開するフ

アーマシに所属する中川博之さんは、その資格を持つ薬剤師の1人。薬局のエリアマネージャーとして日々働きつつ、小児アレルギーエドケータ―として学校の教員や保護者らを対象に教育活動を行っている。ニーズはものすごくあり、やりがいもある一方、人材は不足している。薬剤師もこの資格取得を検討してみてもどうか」と話している。

小児アレルギーエドケータ―の
中川さんのもとには、各地から講演や研修の依頼が舞い込む。最近では学校関係者からの依頼が増え

てきた。
食物アレルギーを持つ小児は年々増加している。学校給食でもアレルギーを含む食品の誤食によ

って、患児は血圧低下や意識喪失などのアナフィラキシーショックを引き起こし、死に至る可能性がある。個人差はあるが症状の発現から心停止までの時間は約30分と短い。緊急時には教員が「エピペン」(アドレナリン自己注射薬)を注射することも必要な場合があ

るが、どのタイミングで注射するのか、どこにどのように注射するのか、教員全員がどのような役割分担をするのかを事前に十分把握していなければ、即時の対応は難しい。
「12年に調布市の小学校で粉チーズ入りのチヂミを食べた生徒が

アナフィラキシーショックを発症し、死亡した事故があった」と中川さん。小児はエビペンを携帯しており教員もそれを把握していたが、注射するタイミングが遅れた。この事故を契機に文部科学省は15年に「学校給食における食物アレルギー対応指針」を発刊。食物アレルギー事故の防止に取り組むよう、関係者に呼びかけている。こうした背景から学校関係者の

意識が高まり、中川さんは関西各地の教育委員会から研修の依頼を受けることが多くなった。学校に出向くと中川さんは、食物アレルギーの概要や症状、エビペンの使い方などを教員に教える。一方的に説明するだけでは身につけにくいので、学校で小児が食物アレルギーを発症した場面をロールプレイで体験してもらい、上手に対応できなかったことを振り返りながら、必要な知識や手技を習得できるように工夫している。

中川さんが担当する今年度の学校関係者向け研修は計16件。研修のほか昨年度は、奈良県教育委員会におけるアレルギー疾患対応指針の策定作業にも専門家として加わった。

「医療の均てん化必要」

各地の子育て支援センターなどに出向き、アトピー性皮膚炎や食物アレルギーの子どもを持つ保護者向けに話をすることも多い。そこで知り合った自治体の子育て支援課の関係者から、地域住民対象の講演を依頼されることもある。

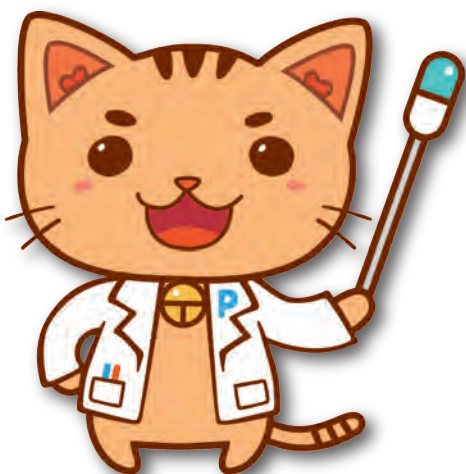
「アレルギー疾患への適切な対応方法は、エビペンの蓄積によって10年間で大きく変わった。医療の均てん化には、患者への正しい情報伝達が必要」と中川さんは言う。以前の方針から180度転

換し現在は、妊娠中や授乳中に母親が原因食物を避けても食物アレルギーを予防できないことや、離乳食を遅らせても食物アレルギーの発症を抑えることはできないどころか、むしろ食べられるものになるべく早いうちから摂取することが推奨される時代になっている。



食物アレルギーを持つ小児がずっと原因食物を避け続けるのは、本人にも家族にも大きな負担になる。血液検査でIGE抗体が高値であっても「感作が成立している」と、食べられるかどうかは別。IGEが高くても食べられる場合はある」と中川さん。専門医を受診し、経口食物負荷試験などで調べて、どこまでなら食べられるのかを相談して決めるよう保護者にアドバイスを送っている。

(11ページへ続く)



薬学生のための求人情報サイト

プレOPEN中!
先行登録受付

ファーマネット2018&2019

病院求人件数

全国の病院・薬局を300件以上掲載!

<http://www.pha-net.jp/>

ファーマネット

検索

ナンバーワン!

今すぐ
登録!